

放送

「口傳は師匠にあり」

稽古は花鳥風月にあり」

の聖訓について

豊竹古靱大夫

今日は、元祖竹本義大夫尊師の訓「口傳は師匠にあり、稽古は花鳥風月にあり」と申す事に就て、御嘶申上ます、義大夫節は元祖竹本義大夫尊師が、其の門人の連盟狀の前書に、藝道訓とでも申しますか、教訓の一文を書いて居られます、其の中に、「口傳は師匠にあり、稽古は花鳥風月にあり」と申すことを教へて居られます、斯道の奥義とか、祕密とか云つた、夫程でなくても、語る要領とか、呼吸とか、口傳は直接に師匠から教へられねば、本當の事が解らない、そして、稽古、修行、研究は廣く天地間のあらゆる物に就て、鍊成されねばならぬと言はれて居ります、是を今日まで種々と考へますと、成程これがさうか、あれもさうかと、うなづかれる事が、澤山に出て參ります、子供時代の私が、見聞き致した事を、一ツ二ツお嘶申上ます、攝津大掾にられました、二代竹本越路大夫師が、御靈文樂座の床を勤めて居られますと、私の師匠、通稱を法善寺と申ました二代竹本津大夫は、床のうしろ又は上手、下手の揚幕の所へ立つて、ム、さうか、ア成程、などと申して、獨り言を言ひ、聞いて居られました。私が御師匠さん、どうなので御座いますかと、伺ひますとお前などには中々解らぬ、が段々年がいつて來たらば、自然に分る時が來

る、二見さんは實に、よく語られると申して、いつも褒めて居られました。また明治廿三年二月興行に八陣守護城が出ました時、三段目に當ります毒酒の段この段切が浪花入江船の段になります、役の都合に依つては、此の船の段迄掛けて一人で語られる大夫さんも有ますが、此の時は掛合になつて正清を越路師、雛衣は新町の綾大夫さん、此の方は尼崎で、琴聲と云ふて、名代の素人、しかし、もとは吟大夫師の門人で小吟大夫から琴大夫と成り引退して、尼崎に住居を構へ、素人で語つて居て、後年に越路師の門人と成つて、文樂へ再出勤した方、おとなしやかな、品位の有る聲柄で良い淨瑠璃でした。夫に師津大夫も此の場の御馳走に鞠川玄番の役を勤めて居られました、御承知の通り段切に、正清の笑ひが有つて是が此の段の聞き所となつて大夫の腹の強さを、御客様が喜ばれる、此の役を聲の綺麗な越路師が語られるので、御客様はどうアノ大笑ひをこなすかと、是れが呼物の一ツで有りました。雛衣の琴唄などが有りまして、終りに忍びが鎧櫃に入込み、正清の動作を伺ひに來ます、是れを看破つて正清が懷鐵炮で打まして、船子ども清めの舟唄々と正清が申ますと「ヤンラ目出度」の、若松様よ、枝も榮へる葉も繁げる、エ

イエイ」と舟唄を歌つて居る間に、舞臺一面の船が、くるりと前のてすりの先きの客席、御客様の頭の上まで、ヘサキの房の下つた所が、グット出て参ります、其の上で正清の人形を遣つて居りました、初代吉田玉造師が、一ツ大見得を切りますと、床の越路師が、義大夫獨特の例の、ム、フン、アアハ、と笑ひ出します、是れが随分長いので子供心に私はいくつ位笑はれるのかと一日數へて見ましたら、其の日は七十八計り笑はれ、そこで正清は、毒酒を吞まされて居りますから、笑ひのとまつた所で、血をはきまして、トン々々と、跡へよろ／＼とします、途端に忍びを足で水中へ、蹴込みますを合圖に、幕切の木頭が、チョンとはいります、是れをしほに終りの大笑ひとなります、此の笑つて居る間に、船が元の通り舞臺へ納まりまして、是れで幕を締めます、其幕の締まると同時に、床のぶん廻しがくると廻つてお仕舞ひになります、是迄越路師は笑つて居られました、擬此笑ひが中々つづかないものだ、と皆申してをりました、我々は聞かして頂いてをりました、どうしてあんなに息がつづか、と、實に驚いて居たので有ります、此の時師津大夫は、毎日此笑ひを聞いて居られて、ア二見さんは息をつぐ事が上手だ、實に旨い事を繼いで行くと申して、感心して居られました、我々共は、どこで息を繼ぐのか、引くのか、一向に分りませんでした、さうかと思ひますと、他の大夫さん方の日々語のを聞いて、師匠はくす／＼笑つてゐられるのを見受けました、其の人達に注意をして上げればよいと私等は思ふて居りま

しても、決して教へて上げない、其の替り先から扱、どうもこゝが旨く語れません、どうやつたらばよいのでせうかと頭を下げて聞きに來れば、とことん迄教へて上げてゐられましたが、是などが、口傳と申す事に當つて参りませう、何事も聞かずに勝手氣儘に語つて居る人は、自分は旨い、ゑらいと鼻を高くして居るから聞きに來ないのだ、さういふ人に、こちらから注意をしても、有難い共思はぬ、却つて知つてゐると云ふ様な顔をする、いはぬ方がよいと申す様な噺もしてをりました、口傳と申しますと、播磨少掾の音曲口傳書の中にはいろ／＼の結構な事を示されてあります、その二三の例を申して見ませう、兜軍記阿古屋の琴責、あこや重忠への應へ、

「勤めの身の心を汲んで、忝ないおつしやりやう、是、はなはだ憂ひなり、但し聲色物まねにならぬ様、重忠阿古屋に見蕩れぬ様、重忠は智仁勇の三徳を兼ね備へたる武士也、人品に心を付けて語るべし、次に曾根崎心中のお初観音廻り、大阪三十三番、すらく／＼と寺々へ参り、伏し拜み寺より寺への道の程、見渡し、遠く、近くの心得有り。併し餘りに念入ると一日には廻りしまはれぬと心得て語る事、又芦屋狐別れの段めつたに泣き語りにあらず、一掬づゝ涙を拭ひては、名残をいふ心なり、其他澤山の語り物に就いての口傳が載つて有りますが省略致しまして、次に、こんな事が書かれて御座います、又淨瑠璃を業とする人は尙ほの事、又慰みに語る方にても一ト節語るとも笑はれぬ様に語るべし、譽められる様に語らうとすれば、聲に慾が付きて、淨瑠璃の文句わからず、彼

情を忘れ、節、音、位、碎けて本意を背くなり、何程稽古上達して、扱も上手ぢやと、ほめそやさう共、聞き人を侮らず音を定め情を深く語れば、聞く人感に打たれ、假令へば小音過聲の人にても、聞く人、ホ、面白い事ぢや、聲が遣り度いと云はゞ是れ則ち譽められたる詞也、譽めると感心するとの違ひあり、篤と思ひ轡べて見るべしと、薄いてあります、前に申しました、元祖義大夫尊師の藝道訓「口傳は師匠にあり」先づ口傳の事は此の位に致しまして、次に稽古は花鳥風月の事に就いて申ませう、私が十六歳から二ヶ年半計り、先代三世大隅師匠に附いて居りましたので、博勞町の彦六座が改まりて稻荷座と成りました當時、暫く御厄介になりました、忠臣藏が出た其時、十段目天川屋の口で、人形廻しと申す場を役附致し、此三味線が只今の仙糸さんが猿治郎時代、此人と一緒に、清水町大團平師匠に、御稽古を御願ひに出しました、師匠はよしと申されて、直に聞かして頂き、又翌日も翌々日も参りましたが、さつぱり解りません、夫れは大學校の博士に、幼稚園の兒童が聞かして頂いて居る事ゆゑ、何事も聞き取り得ないので有ます。此時團平師匠の御言葉に、コレお前も大夫になつたからは、今後よく勉強して、立派な者にならなくては、親達に濟まぬ、それには上下を論ぜず、誰れの淨瑠璃でも聞いて置かねばならぬぞよ、人さんに譽められたらば、其の褒められた所はいまだやれてゐない所だと思ふて尙ほ／＼そこを勉強する事。中々よかつた、うまかつたなと云はれても喜んでならぬ、圖に乗つて鼻を高くしたらば藝の行詰まり、藝人は死ぬまで稽古だぞよ。と教へて頂きました、其の後師匠の膝元へ歸り、文樂座にて修行のやり直し十八歳と成りました九月興行に、日吉丸稚櫻猪狩りの段が役

場で、三味線は現今の七代廣助さんで、未だ竹三郎時代同年の十八歳の頃、五代目松葉屋廣助師匠が、新町通りの玉水の表に住居の頃、此の役のお稽古を御願ひに出しました、快く仕て遣らうと、直に聞かして下さいまして、三日間計り聞きました、所が、是は又、餘りにも語られますのが面白く、聞入つて仕舞ひ、大夫でも是だけ上手に語る方は、少いであらうと、實に驚いたが、自分には、ちつとも覺へられず、サアけふは語つて見よと云はれたが、六ヶ敷で少しも分りませんと申しましたら、アハ、と笑はれて、さうか、無理もない、今は分るまいが、追々にわかる様になる、お前も一人前の大夫とならねばならぬ、どんな下廻りの大夫でも、日々芝居で語つて居るのを、よく／＼聞いて置け、分らぬのが當前だと言はれて、げら／＼笑つて居られました、丁度清水町團平師匠と、同じ様な事を申されましたので、今に心に染み込んできました、昔の文樂は夜明前から、大序が始まつてをりましたさうで私が明治二十二年に、東京から此道の修行に當地へ出て参り御靈文樂座へ見習ひに入れて頂きました頃でも朝の六時や、七時頃から始めて居りましたが、夫より前はまだ／＼早くから始めたものと見へます、が、是へむけて立派な師匠方でも、御辨當持ちで早くから樂屋入りを仕られて、下廻りの役から大勢の大夫衆の役場を聞かれて、ア、あれのアノ節は面白くてよい、是の語り方もなか／＼よいとか申されて、いゝ所を取つて、夫を御自分が應用なさる、そこで、人ひとりには、必ず其持味自然的に旨く語れる所がある物ださうで、夫を上の方が聞かれて、アリアヤ中々いゝ事をやりをるライお前、さつき語つた此所を、今一度語つて見よと申され

「逆賊非道の名を穢す」が正しい

日大、明大、
二松學舎講師 塩田良平

此の「の」は「ナル」又は「タル」の意です。即逆賊非道（又は無道）ナル惡名、盜賊タル惡名といふ意味です。「忠孝の美名」「堂々の陣」といふ場合の「の」と同じ用の方です。それ故この「の」は正しい用の方です。

次に「名をけがす」の「を」と「けがす」との関係ですがこれは「逆賊非道の名」といふものがあるのを、更に「汚す」の意ではなく、さういふ「惡名をとる」といふ意です。例へば

忠孝の美名を輝かす

といふ場合でも、「忠孝の美名があつたのを更に輝かす意味ではなく、これは「美名をとる」といふ意であるのと同じです。「人が惡名をとる」ことは全體として「汚す」と云ふ觀念に相當する所から、かういふ言ひ方をするので決して間違ではない。この場合「逆賊非道に名を汚す」などと改めるのは丁度

忠孝に美名を輝す

と改めるのと同じく、文章を成さぬいひ方で最もいけないと思ひます。

以上申した通りですから「逆賊非道」（無道）の名を汚す」といふ文句だけについては非難すべき點はないのです。むしろ院本でも文法上の間違はあつても文句の改訂は絶対反對といふのが私の意見です。

る、そこでいはれた者は、一生懸命で語りますと、何んだそんな事をやつたのかと落第、是は自分も分らずに、知らず知らず其の目によつて味く語れたので、夫を聞かれて良かつたから語らして見ると、本人固くなつて、懸命にやる故、床で何氣なく語つた様にはやれずに、失敗に了る、其知らず／＼に語るよい所を聞くのださうです、私がお稽古をして頂きました、ある立派な師匠は、斯ういふ事を申されました「わしは此段の筋道を教へるのだから、教へた通りを其儘に語るだけでは、只形だけは出来るにしても、魂が入つて居ないから是を佛藝といふてきらふ、此道筋を渡つて行くうちにも、自分と云ふ物を發揮せねばいけない、教へてもらつた通りより語れぬ大夫では、ぼんくら藝といふ事になる」といはれました、是は元祖義大夫尊師も、既に申されましたが、所謂「格に入つて格を離れ、格を離れて格に入る」と云ふ、意味で徒らに、本格計りに固執しないで、融通性の大事なことを教へられた物と、思はれます、モウ時間が餘りましたから、掻摘んで申上ませう、師匠方が日々文樂座で、其役場々々を語つて居られるを、其床の後ろ、又は御簾の内にて聞かして頂いて門弟共は是れを日々の御稽古に致して覺へ込んだもので御座います、夫ゆゑ昔の文樂座は、義大夫道の大學校だと申して居りました、口傳を師匠から受けることは、最も大事で有る事は申す迄もありませんが、御稽古の大事なことには更に／＼大切で、稽古は花鳥風月、則ちありとあらゆる物に就いて研究もし、勉強も致しまして、一生涯いつでもお稽古だといふ覺悟で、花を見ても、月を見ても、皆藝道のたしに成る様にと、元祖義大夫尊師は私ども末流末輩の者共へ、御教訓なされた物と存ぜられます。今日は是で私しのお話は終りと致します。